変貌する投資環境

第 344 回～フィリピン

インフラ開発で景気浮揚へ

大型案件を日本が支援…2

企業レーダー ～先週の日系企業動向～

「ベトナムのM＆Aサービス広がる」
「物流会社などが人材育成会社」
「三井不のぶどう生産ベンチャーが始動」 …3

わが社のアジア戦略

「カンボジア産シルクで化粧品」
イル・ヴリール、文化復興にも貢献…10

各国情勢

【フィリピン】9月の自動車販売が 23％減
【マレーシア】小売店の 15％が閉店へ
【シンガポール】GDPの下げ幅7％に縮小 …12

ウィークリーレポート ミャンマー

「長期化する新型コロナ第二波」
…16

アジア点描
上から
・ボラカイ島（フィリピン）
・地下鉄（シンガポール）

週報 ASEAN 経済通信

10 月 12 日～ 10 月 16 日のニュースと最新コラム

第 581 号
（2020 年 10 月 19 日）

© 金融ファクシミリ新聞社

TEL：03-3639-8777
Email：news@asean-economy.com

無断コピーおよび転送は固くお断りします

日々のニュースはこちらからご覧ください
https://www.asean-economy.com/

わが社のアジア戦略

イル・ヴリール　加藤和則社長

カンボジア産シルクで化粧品

イル・ヴリール、文化復興にも貢献

化粧品会社のイル・ヴリール（東京都新宿区）が、カンボジア産シルクの復興と高付加価値化に取り組んでいる。同社はカンボジアでエステサロンを展開するとともに、化粧品の販売でも成功した。このたびはシルクの化粧品への活用とともに、伝統文化の回復や、さまざまな製品への応用も視野に、地場産業の育成に立ち上がることとした。加藤和則社長に活動内容などを聞いた。

取り組みのきっかけは――

加藤氏　化粧品にはシルクプロテインを含む製品が非常にたくさんあり、当社でも製品に活用している。シルクプロテインは紫外線対策や保湿などに効果がある。既存製品はすべて日本の国産シルクを使用しているのだが、カンボジアシルクを使えないかと考え、国際協力機構（JICA）の海外展開支援事業、案件化調査を活用し、カンボジアシルクからプロテインを抽出、分析して、化粧品に使えるかという調査を行った。結果的には、カンボジアシルクのプロテイン粒子は日本のものより細かく、つまり肌への親和性が高く、十分に化粧品に使えるとわかった。それをうけて今回は、次のステップである普及実証事業を行うことにした。シルクプロテインの有用性を実証するとともに、それが繊維産業以外の幅広い分野で活用されること、さらには地場産業の発展につながることを目標としている。

カンボジアのシルク産業は――

加藤氏　カンボジアには、カンボジアゴールデンシルクという伝統的な文化がある。それが現在では衰退してしまった。ポル・ポト時代に知識層が虐殺されるなか、シルク農家の専門家らも殺されたことでノウハウが途切れてしまった。養蚕は数学のようなもので、温度を何度にしたら何日後に卵がかえり、何日後に脱皮するか、あるいは違うバラエティの２種を配合させたらどうなるかなど、体系的な知識に支えられている。専門家がそれらをすべて計算して、マネジメントしなければならないが、そうしたノウハウが失われてしまった。残った養蚕農家でも、育てた蚕のうちの８割が死んでしまう。残った２割の繭から、手作業によって糸を紡いで、機織り機で布を織っていくのだが、製品化するまでに非常に時間がかかる。そのためシルク生地は価格が高くなり、売れないから養蚕を続けられない。農家はどんどん廃業していく。

普及実証事業ではどのような取り組みを――

加藤氏　まず、王立農業大学で高品質なシルクプロテインの抽出・品質検査・粉末化を行う設備を設置して、蚕の品種特定やさまざまな調査・分析を行う。さらに、シルクプロテインの検査マニュアルを作成し、大学に品質検査体制を構築する。例えば、各州にある産地からシルクを取り寄せて分析し、コスメにはこの州のこの種類のシルクが適していると分かれば、その結果をもとに農業省や商業省に提言していく。また、当局の認証制度を設

〈無断コピーおよび転送は固くお断りします〉

けることもポイントになる。カンボジアゴールデンシルクは、文化省が伝統品としてユネスコの無形文化遺産に申請を出そうとしているほどのブランドだが、その名を知る人や説明ができる人は少ない。誰でもが勝手にゴールデンシルクを名乗って製品を販売しては、ブランド価値が失われてしまう。当局による「カンボジアゴールデンシルク」の認証、さらに化粧品であれば「フォー・コスメティック」といったかたちで良いだろう。当方は1企業として、1つのベンチマークとして化粧品に利用し、あとは他の企業がそれぞれの製品ごとにリプレースしていく。まずは肝となる技術や知見を、カンボジアでトップの大学に落とせたらと考えている。

さまざまな製品への活用に広がる――

加藤氏　カンボジアは観光立国でもあるため、土産物などでの活用が見込める。富岡製糸場が世界遺産になった時に多くの観光客が訪れたが、その際にはシルクアイスクリームやソフトクリーム、シルクケーキ、シルク餅といった商品が販売された。ケーキやパンを作る日本の企業などと王立農業大学が協力して、製品開発することもできるだろう。当社は、カンボジアで販売している製品の原料をカンボジアゴールデンシルクに置き換えていく。やはりブランディングが重要で、国策としてシルク復興を掲げているカンボジア当局と協力して、宣伝活動などを行っていきたい。日本での利用に向けては、カンボジアシルクの成分に関する登録をしていく。カンボジアゴールデンシルクをさまざまな企業が使えるような登録をやっておく。化粧品会社がこの成分を使用すれば、SDGsの一環にもなるだろう。同業他社にもどんどん使ってもらうことでカンボジアゴールデンシルクのブランディングができて、企業側はSDGsを謳うことができる。シルクの需要が増えて、衰退していた産業の復興につながればよい。

シルクプロテインの抽出方法は――

加藤氏　化粧品で使うにはいくらかの機材はいるが、繭をボイルして不純物を取り除いて、ろ過すればシルクプロテインが抽出できる。最初は液体状のものだ。煮沸する水にシルク成分が混ざったかたちで、カンボジアシルクは黄色いため液体も黄色く染まる。しかし生ものでもあるため、放置すれば3日ほどで腐ってしまう。保存するには冷蔵庫に入れなければならない。そして原料はパウダー化して、パウチで包装する作業も必要だ。それを日本に輸出して、当方が日本の工場でまず作ってみるというところから始めなければならない。

プロジェクトの今後のスケジュールは――

加藤氏　いまのところ21年4月以降に渡航ができるという前提で、準備を進めている。そこから2年間のプロジェクトとして展開していく。シルクの分析や選定のほか、省庁に認証制度について提言したり、省庁を横断したアドバイザリーボードのようなものを企画していこうかと思っている。省庁からそれぞれ担当者が来て、当方の実験の情報、進捗を共有していくような形で。プロジェクトの後は、現地に洗顔用せっけんの工場を設立したいと思う。日本製と同じレベルの製品をカンボジアで作っていく。

以下、ＷＥＢサイトに掲載

カンボジアゴールデンシルク（右）と王立農業大学での研究の様子

〈無断コピーおよび転送は固くお断りします〉